

アイスクライミングの現状と展望

奈 良 誠 之（北海道美唄市）

フリークライミングとは何だろう？どの範囲までを含めるのかを明解に説明することは難しい。そしてフリークライミングではグレードやスタイルが重要な要素として存在し、その部分を突き詰めることができ進化の方法論であると考える。

ではアイスクライミングとは何だろう？これは割と簡単に説明できる気もするが、現状行われている中で明確な答えを出すのは思ったほど簡単ではない。

昨今のアイスクライミングではリーシュをつけたスタイルで登る人はほぼ見かけなくなった。既にリーシュレスという言葉も見当たらないほどに当たり前になってきている。精神的にはフリークライミング同様にテンションレスで登ることを目的とし、技術的には行動のスピードアップが可能となるのが現状のアイスクライミングで見られるスタイルである。しかしリーシュを装着して登ってもアイスクライミングなのである。

要するにアイスクライミングの対義語はロッククライミングであり、フリークライミングではないのだ。最近ではロッククライミングではなく外岩という言葉をよく聞くようになり、ジムクライミングの対義語として使われている。アイスクライミングでも人工的に作られた氷瀑をジム同様に登ることが出来るようになってきている。外氷？生氷？とにかくこれもアイスクライミングである。人工氷瀑をトップロープで登る行為と、山中の氷柱を登る行為を同じアイスクライミングという範囲に含めているのがアイスクライミングの現状である。スタイルはその

言葉に含まれていない。

アイスクライミングの冒険的な要素の中から、よりスポーツ感を高め、終了点までテンションをかけずに登るスタイルであってもフリーアイスクライミングとは言わない。何故ならフリークライミングの定義には用具を使わない事が含まれるからである。アイスアックスとアイゼンを使用するクライミングは未だエイドクライミングの範囲に片足が入っているのだ。

UIAAアイスクライミングワールドカップではコンペレギュレーションとしてスタイルが制限されている。アイスアックスの長さが制限され、グリップは手で持つ以外は禁止されている。アイゼンにも形状制限があり用具を用いて容易にレスト姿勢に入れないとになっている。アイスクライミングのスタイルを明文上で示す唯一のマニュアルはUIAAレギュレーションのみと思われる。



グレードはこれまで同様、時期やコンディションに大きく影響を受ける状態に加え、様々なスタイル

による困難性を1つの数字に含めているのが現状である。あくまで目安の目安であり、アイスグレードはクライマーの能力を示す指標にするには不明瞭な点が多い。

私はそんなアイスクライミングがとても好きである。明確な基準のもとにテストを受けるようなクライミングスタイルはどうにも堅苦しく、自分のクライミングを細分化したスタイルに無理やり当てはめる必要もないと考えるからだ。

アイスクライミングの現状と今後の課題・展望という議題。筆者が私ではなかったらゴール地点は別だったと思うが、私の思う今後の課題はアイスクライミングを明解に分類させない事である。そして展望は可能な限り全てをぼんやりさせたままのアイスクライミングを維持することだと思っている。

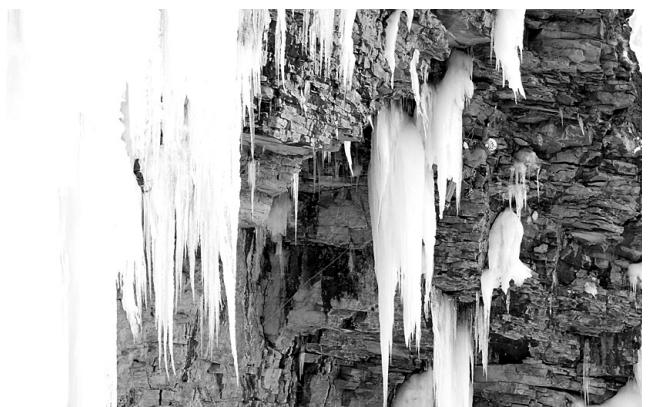
発展とは何を目的とするかによって異なると考える。アイスクライマー人口が増えること、アイスクライミングでの利益が出ること、より高難度のアイスクライミングが登攀されること、ぱっと考えつくことはどれも騒がしい。概ね現状のフリークライミングがこのライン上での展開をしているのではないかだろうか。上記3点は目覚ましく発展し、そのマイナスとして多くの岩場での問題が発生した。誰しもが気軽にクライミングを体験し、アクティビティースポーツとして認知されてきた今、大切な何かが失われているような気もする。先人の思い描く発展したクライミングの未来像は果たしてこうだったのだろうか？

アイスクライミングとは前述の通り実に不明瞭な行為の中にある。それゆえ多くのフリークライマーの言う『アイスの何が面白いの？』『どこでもホールドになるなら簡単じゃん！』という言葉に反論して

はならない。その理解できぬ人達はそっとしておけばよいのだ。わずかしかないアイスフィールドの扉を無理に開き、フリークライミングの足跡を追わないようになることが私の考える対応策である。誘わなくとも本当に求める人は勝手にやってくる。そしてその量は旧来より均衡状態なのではないだろうか。

アイスフィールドの多くは自由に往来出来るような場所はない。なんらかの柵を超えて、なんらかの規制エリアに入り、人目につかぬ場所で行うお忍び行為であることが多い。もし前述する発展を望むのであるなら、その時はアイスフィールドにある様々な障害をクリアにする責任を負うと考える。むやみに人口を増やすことは大切なバランスを壊すことになるかもしれないのだ。

こう書くと閉鎖的な鎖国人間に思われるかもしれないが、残念ながら今の私はこの考えにたどり着いてしまった。前に進めることだけが発展なのではなく、現状を可能な限り維持し、攻撃力ではなく守備力を高めることも必要な形なのではないだろうか。



ここまでアイスクライミングには夢も希望もないように感じたかもしれないが、私はアイスクライミングこそがフリークライミングなのではないかと考える。スタートホールドや終了点を設定され、垂れ下がったヌンチャクにクリップしながら前進するクライミングではなく、好きなところからスタート

3. 登山界の現状と課題

し、自由にラインを書き、どこでも止めが出る、それがアイスクライミングである。グレードなどあてにならず、観客は鹿くらいなもので、自己判断のみで前進をするクライミング。用具は使うが精神的なフリークライミングであり、アイスクライミングには自由があるので。それが魅力であり、美しいスタイルだと考える。1980年代にジェフ・ロウがリーシュをつけて登っていても、私にはそれは美しいフリークライミングに見える。

アイスクライミングの幅や範囲を定めないでおくことは、行動の自由さにも繋がると考える。アイスクライミングというツールを使いどのようにクライミングを展開していくかを考えることも自由なのだ。

アイスクライミングには必ずしもアイスアックスやアイゼンで登るという定義は無い、氷を登ることがアイスクライミングである。数年前にルートを開拓中、氷に埋まったフィスト幅のクラックが出現したときに、私は手にチェーンを巻きフィストで登攀を試みた。この事を伝えると多くの人に「それはエイドクライミングだね。」と評価された。では乾いたクラックをテーピングで登る行為との違いを綺麗に説明できるのであろうか？と、思ったが私にとってはどうでもよい評価だ。解らぬ人を説得する時間があるなら筋トレした方がましである。不明瞭なアイスクライミングはその人の中にそれぞれのルールが存在している。私にとってのクライミングはテンションレスで登り切ることである。岩でも氷でも

同じルールの中で登っているのだ。アイスクラックをチェーンフィストで登っても、岩や氷をアックスでひっかけて登っても、とにかくテンションレスで登ることそれだけが私のルールなのだ。

このルールの中でどう登るか。フリークライミングでもなく、アルパインクライミングでもない範囲で私にとってのアイスクライミングを展開するのである。

アイスクライミングというツールを使い、まだ誰も入らぬ渓谷に降りドデカい氷を登る。アイスクライミングワールドカップで世界を回り競技に参加する。エイドとして開拓された凍ったクラックをナチュラルプロテクションで登る。冬にしか安定しないアホデカいループを登る。どれもアイスクライミングなのだ。

多くの物事を整理し、分類し、評価する。社会にある正義感や倫理道徳のなかで厳しくルールを作る。そんな時代の中でクライミングの多くも社会の中に取り込まれていくのかもしれない。それ以外にもクライミングには先人の作ったルールや、トップランナーが提案するルールがあり、それを疑いなく受け入れ、そのなかで登ることを求められる。そういうクライミングがあってもいい。しかしアイスクライミングはこれからもぼんやりとしたルールの中、クライマーの判断で自由に登る小さな冒険の中にあって欲しいと願っている。どうせ登った氷は春には溶けて無くなるのだから、細かいことは抜きにしよう。

